

論文の和文要旨

論文題目	名詞の内容補充表現 —日本語とドイツ語の対照研究—
氏名	モハンマド・ファトヒー

本論文の対象は、日本語の「飛行機が着陸した(という)事実」、ドイツ語の *die Tatsache, dass das Flugzeug gelandet ist* (飛行機が着陸した(という)事実) のような表現である。いずれの表現でも、動詞を含む節(下線部)が名詞にかかり、その内容を補っている。このような表現を本論文では名詞の内容補充表現と呼び、下線部を補充部、それが係る名詞を主名詞と呼ぶ。(以下、「名詞の内容補充表現」を単に「内容補充表現」と記す。)

先行研究では、内容補充表現は主に形式と構造を中心とした文法論の問題として研究されている。しかし、内容補充表現の意味・機能的な側面及び表現機能の研究はほとんどなされていない。そこで、本論文では、内容補充表現に主にその主名詞の意味や機能からアプローチし、補充部と主名詞がどのように作用し合うかという観点から論じた。具体的に、先行研究で等閑視されていると見られる主名詞から補充部への作用に目を向けることにより、新しい視点から内容補充表現を捉え、その用いられ方について考察した。また、日本語とドイツ語における内容補充表現を対照し、「モノ的」表現への志向性と「コト的」表現への志向性という類型から見た内容補充表現の表現機能を検討することによって、内容補充表現の用いられ方に見られる日本語らしさ及びドイツ語らしさについても論述した。

「モノ的」か「コト的」かという観点から内容補充表現の表現機能を考えると、主名詞が補充部と一体化し、文及び談話のレベルにおいて一つの名詞〈モノ〉として機能すると考えられることから、内容補充表現は「モノ」的表現だと言える。しかし、日本語では、内容補充表現に「コト」的表現と同様の表現効果をもたらすと考えられる一群の名詞があることが明らかになった。この表現効果を「コト化」と呼ぶ。「コト化」のできる名詞は、形式名詞「こと」の延長線上に位置づけられる「話」、「気持ち」、「姿」などの比較的意味の稀薄な名詞群である。これらを Halliday & Hasan (1976) に倣い「一般名詞」と呼ぶ。対訳用例に着目すると、「一般名詞」に富む日本語では、「一般名詞」が主名詞として用いられる内容補充表現、いわゆる装定表現が用いられるところで、ドイツ語では、主部－述部という形式の述定表現が用いられる傾向があることが明らかになった。以下、本論文の6つの章に沿って、研究の概要を示す。

第1章では、先行研究に見られる分類や記述を概観した。対照研究を含む先行研究では、形式と構造を中心とした文法論的な観点からの記述が多く、意味論もしくは機能の面からの記述はほとんどない。日本語及びドイツ語の（個別言語の）先行研究は、主に、内容補充表現の意味的タイプと主名詞の意味的分類という観点からそれぞれの内容補充表現を記述している。これらの先行研究では、補充部と主名詞の関係に言及することはあるものの、主名詞の意味的分類に主眼を置く研究がほとんどである。そして、主名詞を意味的に分類した上で、内容補充表現の記述を行っているが、補充部の主名詞に対する関係を中心に分析している。主な関係としては、「空気が乾燥していたという原因」に見られる寺村 (1993b) の「ふつうの内容補充」及び高橋 (1979) の「内容づけのかかわり」、あるいは「火事が広がった原因」に見られる寺村 (1993b) の「相対的内容補充」及び高橋 (1979) の「状況のかかわり」などが挙げられる。ここでは、前者を「統合補充」、後者を「関わり補充」と呼ぶ。その他に、高橋 (1979) は、「同情する気持ち」のように上位概念－下位概念の関係が認められる「特殊化のかかわり」を提唱している。ここでは、「特殊化のかかわり」も「統合補充」に含めて考える。主名詞から補充部への作用に関しては、大島 (1990) のいう「ラベリング」という概念や Brinkmann (1962) の“Das Substantiv formuliert begrifflich, was der Inhaltssatz seinem Charakter nach ist” (内容節がどのような性質のものかを名詞が概念化する) という記述に見られるように、いずれの先行研究にも、事実として主名詞から補充部への作用が認められるという指摘は見られるが、その作用の具体的な定義や説明などについての言及はなされていない。

第2章の2.1では主名詞リストの作成方法と、分析対象となる事例15,358例（日本語9,710例、ドイツ語5,648例）の収集方法について述べた。2.2の名詞の下位分類に関しては、先行研究の分類を参照しつつ、主名詞によって補充部に付加されると考えられる

意味を手がかりに、多くの名詞に共通する意味に基づいて、名詞を大きく「言語活動」名詞、「思考・心理」名詞、「ことがら」名詞という三つのグループに分けた。最初の二つのグループは、先行研究のほとんどで考察対象に含まれているものである。この2グループを除くと、残る名詞は数が多く、多様な意味を表すものである。それらの名詞は、共通する意味を見出しにくい名詞群であり、「その他」の名詞としてまとめて扱うことが相応しいと考えられるが、このような名詞に見られる何らかの共通の意味を強いて引き出そうとすれば、「ことがら」もしくは「ことがらに関する要素を表すこと」になるだろうと考え、本論文では、「ことがら」名詞と総称することにした。

2.3では、内容補充表現を分析する観点として主名詞から補充部への作用、すなわち先行研究で「ラベリング」などとされる働きに着目する。先行研究には具体的な規定が見られないが、「臭いものに蓋をする／した（という）話／逸話／諺／通報」に見られるように、「話」、「逸話」、「諺」、「通報」という主名詞によって「臭いものに蓋をする」という同じ内容に対して、それぞれの名詞の意味に応じて異なったレッテルが貼られている。このような主名詞によるレッテル貼りが先行研究で言われる「ラベリング」であると解釈できる。本論文では、この主名詞による「ラベリング」の有無に着目し、第一の研究課題として主名詞による作用を探ること、そして第二の研究課題としては主名詞と補充部の相互作用を超え、「モノ的」表現への志向性と「コト的」表現への志向性という類型論的観点から表現全体の表現機能及び効果を検討することとした。

本論文では、主名詞から補充部への作用をその性質によって少なくとも二通りに分けることができると考えた。一つは、主名詞と補充部という二つの要素が融合した以上、相互的に何らかの影響を及ぼし合うと考えられるため、補充部が主名詞の内容を補充するだけでなく、主名詞から補充部に対しても何らかの情報を付加していると考えられる。これを「意味の付加」と呼ぶ。もう一つは、単なる「意味の付加」ではなく、主名詞が補充部に対して、その内容を何等かの範疇に分類するという作用である。ここでは、このような「範疇化」を「特徴付け」と呼び、「意味の付加」と区別する。この主名詞による「特徴付け」の可能性については、(1) 主名詞と補充部の意味関係、(2) 主名詞と共起する述語や主名詞の文中での働き (3) 主名詞の意味という三つの観点から、検討した。

第3章から第5章では、「言語活動」名詞、「思考・心理」名詞、「ことがら」名詞を順番に取り上げ、前記の三つの観点に基づいて、それぞれの主名詞による「特徴付け」の可能性を検討し、主名詞による働きかけについて考察した。以下に、この三つの観点に沿って第3章から第5章で明らかになったことをまとめる。

(1) 主名詞と補充部の意味関係、とりわけ内容補充の仕方に着目すると、主に、「特殊化のかかわり」を含む「統合補充」及び「関わり補充」が挙げられる。「特徴付け」の

可能性という観点からこれらの関係を検討すると、「統合補充」に関しては、主名詞が機能動詞結合に用いられる場合や「特殊化のかかわり」を除くと、基本的に「特徴付け」の可能性が高いと考えられる。一方、「関わり補充」や「特殊化のかかわり」では、主名詞による「特徴付け」の可能性がほとんどないと考えられる。「特殊化のかかわり」では、主名詞（気持ち）は補充部（同情する）に対して上位概念を表している以上、その内容に対してより具体的な意味を付加すると考えにくく、「特徴付け」をしているとは考えられない。「関わり補充」でも補充部（火事が広がった）が主名詞（原因）の内容ではなく、主名詞に対立する概念（結果）の内容を表しているため、主名詞が補充部の内容を（原因として）特徴付けていると言えないからである。

(2) 主名詞と共起する述語や主名詞の文中での働きと「特徴付け」の可能性との関係に着目すると、「特徴付け」の可能性が低いと考えられるのは、「命令を下す」、「許可が出る」、*die Frage aufwerfen*（問いを投げかける）、*das Erlaubnis geben*（許可を与える）のような機能動詞結合の場合、「調子で」のように日本語で主名詞が「で」を伴わない様態など表す場合、*mit der Drohung*（～と脅しながら）のようにドイツ語で主名詞が前置詞を伴った場合が挙げられる。本論文では、機能動詞結合に用いられる主名詞は、名詞性が弱まっており、これらの名詞による「特徴付け」の可能性が低いと考えられる。というのも、動詞が実質的な意味を名詞に預ける機能動詞結合では名詞の独立性が低くなり、名詞と機能動詞からなる全体が動詞的に用いられていると考えられるからである。また、日本語で主名詞が「で」を伴った場合及びドイツ語で主名詞が前置詞を伴った場合に関しては、内容補充表現が全体として文の述語に対して様態もしくは付帯状況などの意味を付加するのに用いられ、主名詞が補充部に対して「特徴付け」をしていると考えにくい。機能動詞結合以外で用いられる主名詞は、基本的に「特徴付け」の可能性が高いと考えられる。

(3) 主名詞の意味に着目すると、それぞれのグループの主名詞の中には、「諺」、「学説」、「不祥事」のような意味の濃厚な名詞の他に「話」、「気持ち」、「形」のような意味が稀薄だと考えられる名詞、いわゆる「一般名詞」があることが分かった。意味の濃い名詞による「特徴付け」は十分可能だと考えられるのに対して、「一般名詞」は必要な意味内容が欠け、「特徴付け」という機能が果たせるとは考えにくい。ここでは、「コト的」表現と同様に、日本語における「一般名詞」は、出来事全体を状況として捉えることができ、そうすることによって個体の輪郭が目立たず、あからさまに出され過ぎることもなく、物事をやんわりと表現できると考えられる。「一般名詞」は、「言語活動」名詞において主に「言葉」、「旨」、「話」の三つだけなのに対して、「思考・心理」名詞において「思い」、「考え」、「気持ち」、「心」、「気」、「感じ」など、「ことがら」名詞において「点」、「件」、「形」、「姿」、「有様」、「状況」など数多く見られる。

第6章では2つの研究課題に沿って主名詞による働きかけを「特徴付け」と「コト化」にまとめた。「特徴付け」に関しては、上記(1)から(3)の三つの観点に沿って本論文の考察をまとめた。「コト化」に関しては、池上(1981/82)の「こと」的表現の形式名詞「こと」に関する論述を参照し、主名詞の中の「一般名詞」を「こと」の延長線上に位置づけられることを論じ、「一般名詞」による「コト化」について考察した。